

Takashima Toujyu Kai

会報

No. 21
2019.9.17

高島藤樹会

(題字は、竹脇雲卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川 225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740 (32) 4156「次代を担う若者に
伝えたいこと」

高島藤樹会 理事 飯田 典子



私事ですが、母校の高島高校から大津市内の高校に異動し、そこで八年間勤務した後、再び母校に戻ってきました。今年で三年目になります。その間に大きく変わったことは、やはり生徒数の大幅な減少です。以前は各学年が十一クラスあり、全校生徒が集まると体育館の端から端まで生徒が並んでいて、足の踏み場もないような状態でした。現在は各学年が五、六クラスになりましたので、当時の約半分の生徒しかいません。体育館のフロアの空いたスペースに、少し寂しさを感じるのも事実です。

一方、以前と変わらず、玄関から職員室に通じる廊下の壁には、中江藤樹先生の肖像画と、その教えを紹介するパネルが飾られています。それには、校章の背景の形が中江藤樹家の家紋である藤の花であることや、藤樹先生の教えである「致良知」、「孝行」、「知行合一」、そして「五事を正す」の簡単な説明文が紹介されています。これは、高島高等学校創立八十周年を記念して「藤陰会・心の教育基金」から寄贈されたものです。普段は私自身、授業の準備

や部活の指導等に追われるばかりで、流れるような日々を送っていますが、ここを通る時は常に身の引き締まる思いになります。

特に、さまざまな場面で見ると向き合う際に「貌言視聴思」の五事を正しているか、と自問自答し反省する場にもなっています。

さて、母校は来年の創立百周年を控え、大きく変わろうとしています。また多様性を認め重んじる時代の流れと共に、学校はそのあり方自体も変化を余儀なくされています。現在は、学校そのものが落ち着かない状況にあるとも言えるでしょう。そのような中であって、次代を担う若者に私が伝えたいのは、やはり変わらず私が子どもの頃に教わってきた、藤樹先生の教えです。例えば、「自分で考え、自分から行動に起こす」、「人の立場に立つてものごとを考えろ」という教えを通して、私なりに、生徒の心を磨き、鍛えていきたいと思っています。

ところで先日、ちよつと嬉しいことがありました。私の母はよく自宅付近を散歩します。高齢になり、足



腰が弱っていくのを少しでも遅らせたいという思いから、朝夕の散歩を日課にしています。その日、私が仕事を終えて帰宅するとすぐ、母は私に次のように話してくれました。散歩の途中、家の近くにあるバス停の前の縁石につまずき、地面にへたり込んで、しばらく立ち上がれなかったそうです。そこへ一人の男子中学生が自転車を通りかかり、手を引って母が立ち上がる手助けをしてくれたそうです。「大丈夫ですか？家まで送りますよ。」と言われたそうですが、母は、家はすぐ近くだから大丈夫です、ありがとう、とお礼を言って帰って来たそうです。名前も聞けなかったけれど、その優しい心遣いが、とても嬉しかったそうです。私も、この中学生の咄嗟の行動や、かけてくださった優しい言葉に對し、本当にありがたいと思いました。

もちろんこのようなことは、世の中のどこでも起こっている些細な出来事かも知れません。ですがこの中学生の姿勢には、ご家庭、学校の先生方、そして周囲の方々から連綿と伝えられてきた藤樹先生の教えが根底にあり、必然的に現れるものなのでしょう。そして、それが「高島プライド」として、次の時代、その次の時代の子どもの心に受け継がれていくことを心から祈っています。

六月十六日（日）、安曇川公民館において、総会並びに研修会（講話）を、百二十六名（内委任状百九名）の参加を得て開催しました。（事務局）

令和元年度 総会

田中清行会長の挨拶に続き、ご来賓の高島市長 福井正明様からご祝

辞をいただきました。その後、藤樹賞受賞者の表彰に移り、川越常務理事より藤樹賞授賞の報告がありました。（後段の詳細を参照）

受賞者の上田藤市郎先生と北川暢子先生に、会長から表彰状と記念品を贈呈されました。

引き続き、高橋志郎さんが議長に選出され、議事に入りました。はじめに平成三十年度の事業報告と決算報告並びに監査報告があり、承認されました。

次に、報告事項である令和元年度事業計画及び予算が事務局から報告されました。続いて、理事（三田村弘子氏）欠員による新理事（木村健治氏）役員の改選が承認されました。

令和元年度 高島藤樹会総会

議事終了後の「その他、意見」では「会の財政逼迫の折、通信方法等にも工夫され、節約に努めてほしい」とのご意見が出されました。最後に、徳丸和枝副会長の閉会の挨拶で、総会を閉じました。



今年度の事業実施の方針

◎中江藤樹先生の遺徳に親しむ高島市民をはじめすべての人々に対して、先生の思想の現代的意義研究顕彰及び普及を図るため、当会のビジョン「温かくて深い、近江聖人中江藤樹の『孝』の思想を高島から全滋賀へ、全国へ、全世界へ広める」に沿って、以下の事業を行う。

- ・心のセミナーとして、藤樹人間学塾百回記念も兼ねて、令和元年十二月にまなざし童心塾で（二社）実践人の家理事長の廣瀬童心先生を招いて講演会を実施する。
- ・毎月、藤樹人間学塾を行って、『中庸解』を学び、日々の生活や実践活動に生かすよう図る。
- ・中江藤樹座像の二次的著作物の制作・販売を検討し、会員からの注文に応じて、一定量に達すれば販売する。
- ・学校における道德等の授業に「中江藤樹の話」を活用されるよう、引き続き学校に働きかける。
- ・藤樹紙芝居を活用して、先生の教えが子供たちからお年寄りまで幅広く親しまれるように図る。
- ・当会の趣旨、活動内容が周知されるよう「会報高島藤樹会」の充実を図り、年三回発行する。
- ・ホームページを当会の活動にリンクさせて充実を図る。
- ・当会の趣旨、活動内容を周知するため、高島藤樹会の名刺を制作する。
- ・藤樹先生の教え、生き方を啓発されている方の表彰を行う。
- ・三月七日の立志祭の日に理事が学校訪問して、小学三年生に「五事を正す」のクリアファイルを贈呈する。
- ・各地で、「中江藤樹の話」の要望

藤樹賞受賞者の報告

表彰委員会 川越 清司

があると進んで講話を行う。
・藤樹書院・藤樹神社・中江藤樹記念館等と連携して「藤樹祭り」ができるよう働きかける。
・当会の趣旨に賛同する正会員、賛助会員の勧誘を行い、会員の増強を図る。

藤樹賞授賞にあたり、藤樹賞の理念を「藤樹先生の生き方や考え方に共感し、それを広めようという志を持って活動されている団体や個人の方を表彰する」と決めました。

本年度の総会において上田藤市郎先生、北川暢子先生に授与させていただきました。

上田先生の受賞理由は、高島藤樹会生みの親であり、物心両面にわた



り援助をされ藤樹会の基盤を確立していただきました。特に藤樹先生生誕四百年祭時には孔子の里、山東省曲阜へ数度の訪中も重ねられ、藤樹書院にある孝経の碑の設置など最高のリーダーシップを発揮され、盛大に生誕四百年祭を終えることが出来ました。受賞後のスピーチでは藤樹書院に掲げてある扁額の致良知の書体「篆書体」(てんしよたい)についてプロジェクトを使って説明されました。初めて見聞する参加者がほとんどでした。



北川先生は、紙芝居十八話・藤樹かるたを教材委員会の一員として作成され、高島市一円の子供たちや地域の方々に読み聞かせをしていただきました。数年前には大洲市の教育委員会に小学校の先生を対象にし

た、紙芝居を使つての道德の講師として招請され活躍をされました。今回の受賞には大変困難を極めました。両名とも固辞をされ藤樹賞の重みを感じられました。

上田先生は月に一度は書院に於いて論語・史記の学習会が続けられています。そして藤樹先生の取り持つ縁で中国の若手経営者に藤樹先生の教え、又トイレ掃除の実践など大活躍中です。

北川先生は体調が万全ではなく授賞式の参加が心配されましたが、家族同伴で参加されました。

後の講話時には当時を思い出しながら、満面の笑みを浮かべられお話をしていただきました。役員一同ホツとした瞬間でした。お二人には益々お元気に活躍されることを願います。



ご案内

藤樹人間学塾 百回記念

中江藤樹・心のセミナー

◆日時 令和元年十二月七日(土)

十四時～十六時三十分

(十三時三十分開場)

◆場所 新旭公民館

多目的ホール

◆参加費無料(定員百名・先着順)

◆主催 NPO法人高島藤樹会

◆後援(予定) 高島市、高島市教育委員会

■講演 (十四時十分)

演題 「孔子の郷、曲阜と

藤樹の里、高島」

講師 田中 清行

(NPO法人高島藤樹会会長、
藤樹人間学塾塾長)

■メイン講演 (十五時)

演題 「現代に生きる藤樹学、

森全一学」

講師 廣瀬 童心 先生

(一社)実践人の家 理事長

■廣瀬 童心 先生の略歴

一九四四年滋賀県米原市生まれ。元中学校長。

四十歳より道友誌「まなざし」を四人で毎月発行して三十五年、ご縁ある方々にご恩報謝している(八百部)。

月一回「寺子屋まなざし童心塾」を二十一年余続け、その他多数の場で塾を開催し、いずれも学びと出会いを深めている。

二〇一三年四月より、(一社)「実践人の家」理事長に就任、現在に至る。

■懇親会 十七時～十九時

■会 費 五千円

■場 所 「ウエストレイク

ホテル可以登楼」

JR安曇川駅前

◆詳細は、同封のチラシをご覧のうえ、チラシ裏面の申込書により、お早めに申し込んでください！



藤樹人間学塾…

藤樹思想を学び考え実践する

塾長 田中 清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に藤樹思想を学ぶとともに、今日的意義を自分の頭で考え、仲間と議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月原則第一土曜日の午後、開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

五月十二日(日)午後、第92回人間学塾を安曇川公民館で開催しました。

冒頭、カンボジアでアンコールワット遺跡の発掘・再建に献身的な努力をされてきた石澤良昭氏のお話をしました。……遺跡の修復において、最も留意しなければならないことはカンボジア人の価値観を重視することだと。

そして『中庸解』の十三章の続きを学びました。君子の道は四つあるが孔子はその一つも十分できていないという。それは相手の求めるところを十二分に尽くすことは難しいということ。普段の言動の中で特に言葉は一番現れやすいので、つつしむ方がよい。心に余裕を持つようにして相手を批判するのではなく自分を反省する…。

フリートークキングでは、「性善説・利他が学べて新鮮。性悪説・自利とのバランスが大事だと思う」などの意見が出ました。

六月一日(土)午後、第93回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

『中庸解』第十四章の「君子はその位に素して行い、そのほかを願わず…」を学習しました。大意は「立派な人物は、その置かれている境遇に執着しないで行うべき道を失わない。自分の境遇を超えてあれこれ心を動かさない…」。藤樹先生は素を空と解釈されていますが、私はその空は『致知』一月号で横田南嶺師が述べられている無の境地と同じで、そこに至れば「随处で主となる」ことができると話しました…。

参加者から「空＝無はたいへん深い意味があるのではないか。それが分かるように努力したい」、「自分の人生、場面、場面を振り返りながら十四章を考えられた」等の感想をいただきました。

塾終了後、場所を替えて懇親会を行い、「藤樹祭りを多くの関係者と一緒に行いたい」などの話で盛り上がりました。

七月六日(土)午後、第94回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

『中庸解』第十五章の「君子の道は例えば遠きに行くのに必ず近きよりするが如く、高きに登るに必ず低きよりするが如し。妻子好合し、兄弟和楽して楽しむ…」を学習しました。大意は「立派な人物は、大志を目指すことも足下のこと一家の中を治めること



からからしつかり行っていく…」。実行がなかなか難しい課題です。これについて、「千里の道も一歩から」、「トヨタ式5S」、「横田南嶺師の看脚下」等を用いて解説しました…。

出席者から「TVで、地元で不評だった産廃処理業者が森づくりを始めて、森が完成したら子供たちが入社したいというまでになり、地域に受け入れられるようになった話を視た。これはこの塾で学んでいる『利他』の行動が実を結んだのだと思った」、「大きな目標に向かう時、時々挫折しそうになるが、今日ヒントが得られた」等の感想をいただきました。

八月四日(日)午後、第95回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

『中庸解』第十六章の「子曰く、鬼神の徳たる、それ盛んなるかな…」を学習しました。大意は「天神の徳というものは実に盛大なものである。万物は天神のお陰で生まれその形体を得たものである。人はその最たるものであるが、善に従うと福が来て、悪に従うと禍が来る…」。

マララというパキスタンの少女が女性に教育を受けさせるために熱心に活動をしていてタリバンに頭を銃撃されたが軌跡的に助かり、その後も活動をして最年少でノーベル賞を受賞した話をしました。命が助かったのは天神のはたらきではないかと。

フリートークキングでは、「京都アニメーション放火事件」で人々に喜びを与える活動をしていた三十五人もの人が犠牲になったことについてどう考えるべきか、等について議論しました。本塾に関心のある方は是非お越しください。心からお待ちしています。

【藤樹人間学塾 今後の予定】

十月六日(日) 十一月二日(土)

◎十二月七日(土) 一月五日(日)

三月七日(土)

◆十二月は、百回記念として「中江藤樹・心のセミナー」と同時開催

■時間 十五時～十七時(原則)

■場所 安曇川公民館

◎印は塾終了後、別場所で開催あり

ひじりの声

上田藤市郎

科学技術の進展によって多くの人々が様々な情報を容易に入手できることとなった。しかし、その情報の真偽や価値は示されていないので、情報を見聞きする私達が自分で判断し、対応しなければならぬ。また、自分が誤った判断に至った結果の責任を、その情報源に求めるのは、いかなるものであるうか。藤樹書院に掲示されている「藤樹規」の『己の欲せざる所、人に施すことなかれ。行いて得ざることをあらば、これを己に求めよ。』に思い当たる。

国内、国外を問わず、世界を駆けめぐる情報に惑わされずに、落ち着いて静かに自分の気持ちで本当のことを見つめる姿勢を大切にしたい。現代の政治家は、自国の利益を第一にする。他国の国民や難民に苦痛や負担を強いることがあつたとしても、自国の利益を優先すれば、国民の支持を得られると考えているようだ。藤樹先生が掲げた「藤樹規」の精神からは程遠い志である。人類の共存は国際社会の基盤であり、互助の精神は必然的に自己抑制を必要とする。他国を侵略して自己増殖する結果が、第二次世界大戦を招いたのだ。国家の横暴に比して、民意の力はちっぽけなものだ。しかし、正義は朽ちてはならないのである。

「藤樹紙芝居」の紹介⑭

『うそはつけぬ』

(解説)

中江藤樹先生は愛媛県大洲での時代に、十九歳という異例の若さで藩内の一部を任せられ、郡奉行(年貢・現在の税金の徴収や地域の訴訟に関する役職)となりました。藤樹先生は、弱い立場の農民たちに、いつも思いやりをもって接していました。

当時の米作りは、自然任せで大雨や干ばつですぐに被害が出て、季節によっては米の収穫量にも大きく影響する時代でした。米の増減収は、年貢米として直接藩の財政を左右するだけに、常に米の生育状況に気遣っていたことでしょう。

しかし、農民たちが、常日頃からお米を主食にすることはまれで、「ヒエやアワ、芋類」等がほとんどであったと思われます。そのような時代を背景に、まっすぐな心で、いつも農民の暮らしと田畑のことにも心配りをしてくれる郡奉行の与右衛門さんには、農民の心も穏やかになり、うそをついてまで年貢の減額を言えなかつたと伝えられています。

この紙芝居では、与右衛門さんと農民とのやりとりを通して、人の真心に触れる、温かみのあるお話にしました。

子どもたちに、やさしい心を持ち

続けることの大切さが伝わればと、願っています。

(紙芝居)

① ここは、中江与右衛門さんが、十九歳の若さで郡奉行という役職についた、大洲(愛媛県)のご城下です。周りには青々とした田んぼが広がっています。今年は、お米の苗も元気よく育ち、気持ちよい風に揺れています。そんな田んぼを見ながら、太吉さんが言いました。

太吉「うちの田んぼは、お米の苗もよく育ち、たくさんとれそうだ。壮助さんの田んぼはどうだ。」

壮助「うちの田んぼもよくできています。秋が楽しみです。これから家族みんなでがんばって世話をするぞ。」

農民たちは、顔を合わせるとそんな話をして喜んでいます。



② ところが、秋が近づいて稲穂が出てくる頃から、毎日のように大雨が降り続きました。



郡奉行の与右衛門さんは、農民たちの田んぼや畑が心配になりました。雨の降る中を、『稲や野菜が水につかっているかもしれない』

と、田畑の様子を見て回りました。

与右衛門「これはいへんだぞ。早く雨が止まないと、年貢(税)のお米も、農民が食べる物もとれなくなるぞ。」

と、心配になってきました。

③ 半分抜く

嘉助さんの田んぼは、低いところにあります。そのため稲が水にどっぷりとつかっています。

嘉助「今までせっかく一生懸命田んぼの世話をしてきたのに、このままではお米がとれなくなるぞ。ああ、どうしよう。」

と、心配でたまりません。



〽全部抜く〽

でも、少し高い所に田んぼがある
弥平さんは、

弥平「ああ、よかった。こんなに雨が降っているのに、うちの田んぼでは水の被害が少なくて助かった。何とかお米もとれそうだ。」
と思い、安心してにこにこしました。

④ 村々の田んぼを見て回った与右衛門さんは、おどろきました。

与右衛門「これはかなりの被害が出そうだ。困ったことになったぞ。」
そこでお城のご家老のところへ相談に行きました。

与右衛門「ご家老様、今年の稲はよくできて、たくさん米がとれると思っていました。しかし、この間から続く大雨で多くの田んぼで稲穂が水につかり、このままでは、

年貢米も農民が食べる物もとれなくなるかもしれません。」

家老「うーん、心配していたがやはりそうか。年貢米も重要だが、農民の食べる物がないと、もっと大変だ。」

与右衛門「はい、そこで困っている農民には、『奉行所に相談に来るように』と、おふれを出したいと思います。よろしいでしょうか。」
家老「よからう。農民の話をしっかり聞いてやりなさい。」



⑤ そこでさつそく、与右衛門さんは、おふれ書を村々の中に立て、農民たちに知らせました。

『今年は雨の被害が大きく、お米のとれる量が少なくなりそうなので、年貢について話がしたい人は、奉行所へ相談に来るように。』

おふれ書きを見た農民たちは話合っています。

壮助「嘉助さん、相談に行ったら、

本当に話を聞いてもらえるのかなあ。」

嘉助「壮助さん、それはわからないけど、みんなで行ってみようよ。」
そこで、みんなで奉行所へ出かけました。



⑥ 嘉助さんや弥平さん達が奉行所へ行くと、与右衛門さんが、みんなの顔を見回しながら心配そうに言いました。

与右衛門「みんながせっかく心を込めて作っている田んぼが、長く降り続く大雨で大変なことになっていますね。とても心配なことだ。」

太吉「お奉行さま、そうなんです。どうなるんでしょうか。」

嘉助「それで私たちも、ご相談に来

たのです。」

与右衛門「わかりました。それでは、みなさんの田んぼの様子は今、どうなっているか、聞かせてください。」



⑦ 嘉助さんは、頭を地面につけて、与右衛門さんに訴えました。

嘉助「お奉行さま、私の田んぼでは、元気な稲穂がたくさん出て、『今年は豊作になりそうだ。』と喜んでいましたが、この大雨でどつぷりと水につかりました。たおれている稲もたくさんあります。これでは、どれだけお米がとれるかわかりません。このままでは、お城に出す年貢の米も、私たち家族が食べる物もありません。どうか、年貢を少なくしてもらえるようにお願いします。」

与右衛門さんは、涙をこらえなが



ら話をする嘉助さんの顔をじつと見つめました。

与右衛門「そうですか。それはたいへん気の毒なことだ。何とかしてあげたい。」

と言って、考え込みました。

⑧ **与右衛門**「次に弥平さんの田んぼはどうですか。やはり、お米はだめになりそうですか。」

与右衛門さんは、弥平さんの目をじつと見てたずねました。少し高いところ田んぼがあつて被害の少ない弥平さんでしたが、心の中では、『私の田んぼも、稲が水につかつてしまつて困っています。』と言うつもりでした。しかし、

弥平「私の田んぼは少し高いところにあつて、大雨の被害も少なく今年は何とかお米がとれそうです。」
弥平さんは、与右衛門さんの優しい言葉や心づかいにどうしてもうそをつくことができず、本当のことを



話しました。与右衛門さんは優しくうなづきました。

与右衛門「それはよかった。これからもお世話にはげんでください。」

⑨ みんなの話を聞き終わった与右衛門さんは、相談に来た人たちに言いました。

与右衛門「みなさんのお話はよくわかりました。年貢を減らしたり、無くしたりすることは、大変大き



な問題です。しかし、みなさんの願いが叶うように、奉行として努力します。安心して、今日はこれでお帰りください。そして、みなさんや家族の人たちが、病気などにかからないように気をつけてがんばってください。」

農民たちは、ほつとして奉行所を出ました。

太吉「嘉助さん、やっぱり相談に来てよかったなあ。」

嘉助「そうだ、そうだ。優しいお奉行様で本当によかった。」

弥平「あのお奉行様ならきつと何とかしてくださるよ。」

みんなは与右衛門さんの優しい言葉や家族への温かい心づかいに感謝しながら帰っていききました。

このように、与右衛門さんはたくさん農民の相談を受けました。

⑩ 〓 半分抜く 〓

与右衛門さんはお城へ上がりまして。

そして、ご家老さまに言いました。

与右衛門「被害はたくさん出ていま

す。そこで、被害の大きい田んぼについては、年貢を減らしたいと思います。いかがでしょうか。」

家老「さすが中江殿だ。よく調べて

きたな。水害の大きいところは、年貢を少なくすることをお殿様にお伝えしよう。中江殿、すぐにお

ふれを出しなさい。」

与右衛門「ありがとうございます。



さつそくみんなに知らせます。」

与右衛門さんは、うれしそうに言いました。

〓 〓 ここで全部抜く 〓 〓

そしてまもなく、農民におふれが出されました。

『水害による米の被害が大きい田んぼについては、年貢を減らすことにします。』

農民たちは、大喜びで与右衛門さんやお殿様に感謝し、また、少しでも多くお米や野菜がとれるように元氣を出して働きました。(おしまい)

▼制作・発行 藤樹紙芝居制作委員会

▼脚本・挿絵 高島藤樹会教材委員会

▼制作委員 足立清勝・飯田典子・石黒紀代子・北川暢子・清川貞治・高谷美智子・山本義雄 (五十音順)

▼参考文献 『児童用副読本 藤樹先生』(高島市教育委員会 編集・発行)

『天命の人』(淵田隆雄 著)

『中江藤樹と大溝藩』(松下亀太郎 著)

古川修先生記念会 発行

藤樹書院・良知館通信⑨

儒式祭典について 志村 洋

儒式祭典については、藤樹先生全集第五冊、巻之四十三の三三(一七〇頁)に、明治三十年(一八九七年)は没後二百五十年の忌辰に相当スルを以て……、京都下御霊神社社司、出雲路興通氏指導の下に文公家禮に遵拠し厳肅なる儒式の祭典を興行せり、とあるように、この藤樹先生二百五十年祭から現在の祭式が定まりました。

それ以前の儒式祭典はどのような形式であったのか。藤樹先生全集を紐解いてみたいと思います。

藤樹全集第五冊、巻之四十三の三二(一六七頁)に「没後に於ける祭祀の模様」と題した記述があり、志村竹涯翁の「書院記事」中より、藤樹先生年忌に関するものを抄録すべし、と記し。百回忌(延享四年・一七四七年)、百五十回忌(寛政九年・一七九七年)、二百回忌(弘化四年・一八四七年)の献立が載っています。百回忌では、【一】膾(似鯉・大根・金柑)、煮染(里芋・椎茸・かんぴょう)、汁(味噌・鯉・柚・蓮芋・松茸)、飯(香の物／鯛焼物・奈良漬・かけ汁)、【二】刺身(鯉細作り子付き・生姜・柚)、すまし汁(茗荷・牛蒡・山椒)、切煮(鱒蒸・葛あんかけ)【初献】大鮎あら塩焼【亜献】鴨焼鳥【終

献】鮑、吸物、松茸【後段二】鶏卵餅、砂糖あん、茶、菓子(梨子)以上。百五十回忌では、膾(鯉魚・とうの芋・青豆)御汁(鯛・大根・茗荷)、煮物(里芋、昆布、焼豆腐、ゼンマイ)、御飯平盛(鯉魚くずかけ)、向詰(鯛)刺身(鯉・煎酒・生姜)御酒肴、【初献】はやすし【亜献】松茸・すり柚・ひたし物【終献】

二百回忌では、膾(鯉魚・大根)汁(鯉味噌)壺(里芋・ゼンマイ・焼豆腐)平(あめの魚・松茸・青い)焼物(鯛)猪口(ひたし物)御飯(赤飯と香物)【初献】鯉魚・鮎【亜献】ウグイ白焼【終献】鯉刺身、茶、菓子、以上。式終て後、赤飯五斗、酒肴(ゑび、にしめ、なます、しいらぬた、ひたし)。村中へは酒肴、他所参拜人に赤飯酒肴を出す。となつています。

「鯉魚」というのは、「ビワマス」のことで、琵琶湖で獲れた物ですが、「鯛」「鮑」が献立にあります。海産物をどのようにして運んで来たのか興味があります。また、「大鮎あら塩焼」「鴨焼鳥」など旨そうな焼き物が並び、松茸の汁物とか、今では羨ましい限りです。進饌物は、その時々には献する事が出来る物が献立されたのではないかと思います。このようにご馳走が並んでいるのは藤樹先生への思いの深さが表れているように思われます。

近年の儒式は、明治期に定まった

祭式に拠り執行しますので、毎年同様の物を饌品としています。祭式中は助奠が目線より高く奉じるので「進饌品が見え難いのですが、式後ゆつくりご覧いただければ、儒式の愉しみも増えるかと思っています。九月二十五日は、どうぞ、儒式祭典へ。

賛助会員一覧

新規賛助会員のご紹介

○保木機料 株式会社

(高島市新旭町藁園)

○株式会社 Crow's

(千葉県市川市八幡)

ご協力ありがとうございます。

○ウエストレイクホテル可以登楼

○株式会社 大山建設

○川島酒造 株式会社

○株式会社 桑原組

○有限会社 宏和商事

○税理士法人 小畑会計事務所

○有限会社 白浜荘

○社会福祉法人 新旭みのり会

○ソエダ 株式会社

○田中マネジメント事務所

○株式会社 TADコーポレーション

○鉄屋商事 株式会社

○寺子屋まなざし童心塾

○株式会社 戸井薬局

○とも栄 藤樹街道本店

○中村印刷 株式会社

○株式会社 中村測量設計

○ニッケイ工業 株式会社

○有限会社 馬場塗装

○有限会社 綿庄食品店

(五十音順)

あとがき

「教育」という仕事は…

学校では、夏休みが終わり、二学期が始まりました。子どもたちは、頑張った多くの宿題を仕上げて提出したことでしよう。自由研究、工作、絵画、作文などは、個人が選択して取り組むことが多いようです。この時期になると思い出すことがあります。

新任教頭の一年目、九月のことです。その町の教育長さんから、私を指名で電話があり、「青少年育成県民会議に提出する『作文』が、決裁で回ってきたが、学校から町教委へ出す前に、君はこれに目を通したのか?」との指摘です。「読んでおりません」と答えると、「すぐに教育長室へ来なさい」と呼ばれました。

行くと「この作文は大変よく書けている。しかし、誤字や文の繋がりの不備など、清書させるべきだ」とのこと。『この作文は学校代表、町の代表として県に行く。そのこと以上に、この子は夏休みに懸命に書き上げたもので、担任はそれに応えて丁寧に見てやるべきだ。そのように指導するのが君の仕事だろう』と。(清書して再提出、結果は県の最優秀賞に)

「真に、一人ひとりを大切に」「教育は流れ作業ではない」「中途半端ではだめ」………苦い経験です。

(H・M)